

# 京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

## 2021

### 〈論文〉

中米イロパango火山の破滅的大噴火は、タスマルを中心とした  
古代都市チャルチュアパを放棄させたのか？  
その大噴火の絶対年代はいつなのか？

..... 柴田 潮音 1

2021年ペルー大統領・国会議員選挙  
—カスティージョ急進左派政権登場の過程と「地方の叛乱」の行末—

..... 中沢 知史 39

現代におけるユカタン・マヤ系先住民間の「好き」に関する考察  
—言語学及び人類学的視点からの意味分析—

..... エリ・カサノバ・モラレス／大倉 由布子 63

### 〈研究ノート〉

戦前日本におけるラテンアメリカ研究の見取図

—野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎の業績、およびその他の研究の担い手—

..... 辻 豊治 89

### 〈研究展望・動向〉

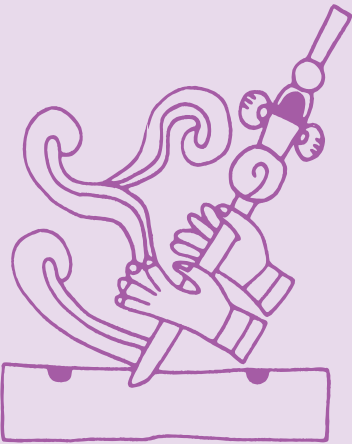
16～18世紀のマヤ研究における考古資料と文献史料の重要性と問題点

..... 白鳥 祐子 105

### 〈書評〉

渡邊利夫著『国際政治のなかの中南米史—実体験を通してリアリズムで読む—』

..... 牛島 万 117



〈論 文〉

## 2021年ペルー大統領・国会議員選挙

—— カスティージョ急進左派政権登場の過程と「地方の叛乱」の行末 ——

中 沢 知 史\*

### キーワード

2021年ペルー大統領選挙、カスティージョ対フジモリ、急進左派政権、人間開発指数、地方の叛乱

### Resumen

El 28 de julio de 2021 en el Perú, el día que se celebra el bicentenario de la independencia del país, asumió como nuevo Presidente de la República, Pedro Castillo Terrones. La victoria de Castillo en las elecciones presidenciales y parlamentarias realizadas en el primer semestre del mismo año, aunque con escasa ventaja frente a su rival Keiko Fujimori, fue una sorpresa. El izquierdista radical Castillo, profesor rural, de la región norteña Cajamarca, dirigente de una pequeña fracción del sindicato magisterial y miembro de las Rondas Campesinas de su territorio natal, era un candidato casi desapercibido tanto por los grandes medios de comunicación como por las redes sociales. No existe un precedente similar donde una persona de perfil bajo, cuyo origen no pertenece a la élite limeña, alcance el sillón presidencial. ¿Cómo llegó Castillo al poder? El presente artículo rastrea el surgimiento de un Presidente campesino, *outsider* y antiestablishment en el Perú, a través del resumen de los acontecimientos preelectorales (como el contexto socioeconómico, el impacto de la COVID-19 y la crisis política permanente desde 2016), así como el análisis del proceso electoral y postelectoral. Presenta también, a modo de conclusión, unas perspectivas de futuro, cubriendo los sucesos posteriores al comienzo del nuevo gobierno y hasta la fecha de redacción (mediados de septiembre de 2021).

---

\* 立命館大学嘱託講師・京都外国語大学ラテンアメリカ研究所客員研究員

## はじめに

2021年7月28日、独立から200周年の節目を迎え、共和国として3世紀目に入ったペルーで新しい大統領が就任した。新大統領ペドロ・カスティージョ（Pedro Castillo Terrones）は同日国会で行われた就任演説で、都市と農村の格差解消（「第二の農地改革」）、地方分権の推進、公教育への支出増や天然資源開発への政府の積極的関与を通じた「大きな国家」化、そして現行憲法の破棄と新憲法制定のための制憲議会（Asamblea Constituyente）招集等、急進左派的な変革を政策として掲げた（Presidencia de la República del Perú, “DISCURSO DE ASUNCIÓN...”, 2021年7月28日）。スーツにネクタイでなく、アンデス風の刺繍を施したマオ・カラーを身にまとい、出身地の北部カハマルカ州のシンボルである白いつば付帽子を被ったまま就任式に臨んだカスティージョの演説は型破りであった。



写真1 国会で就任演説を行うカスティージョ大統領

出典：ペルー大統領府

カスティージョは政治家経験が全くないアウトサイダーとして2021年総選挙に大統領候補として突如登場し、対立候補ケイコ・フジモリ（Keiko Sofia Fujimori Higuchi）を僅差で破って大統領の座についた。カスティージョは政界アウトサイダーであるだけでなく、非エリート層の出身である。最貧州の一つに数えられるカハマルカの農家に生まれ、長く地元で教員をしていたロープロファイルな人物である。このような経歴の人物がペルーの大統領に就いた例はない。前回2016年選挙では新自由主義路線を継続する右派に支持が集中したこと（清水2017）に鑑みると、劇的な転換である。

本稿は、2021年ペルー大統領選挙の過程を、「地方の叛乱」(subversión de provincias)という観点から整理することでカスティージョ急進左派政権登場の背景に迫ろうとするものである。「地方の叛乱」とは、大部の通史『ペルー共和国史(1821～1933)』で知られる歴史家ホルヘ・バサドレ(Jorge Basadre)が1931年の著作『ペルー：問題と可能性』(*Perú: problema y posibilidad*)のなかで使った言葉である(Basadre 1987:202-223)。同著は、戦間期におけるレギア(Augusto B. Leguía)の独裁体制(1919～1930年)がアレキパの軍人サンチェス・セロ(Luis Sánchez Cerro)によって倒されるなど、緊迫した政治情勢を背景にして書かれた。バサドレはペルーにおいて植民地期から連続と続く、中央(リマ)に対する地方の反感を叙述し、時としてかかる反感が反中央集権主義、反リマ中心主義のうねりとなって爆発する事象を指して「地方の叛乱」と名付けたのである。

むろん、バサドレが描く前世紀と今日とは情勢は異なる。しかし、ペルーでは20世紀以降今日に至るまで、リマを中心にその周辺と太平洋岸(コスタ)の一部に富が集中し、地方(特に山岳部のシエラと東部のセルバ)は経済開発から取り残されるという不均衡な発展パターンが綿々と踏襲されてきた(村上2021a:53)。およそ100年前、こうした構造への不満から反中央集権主義、反リマ中心主義のうねりが地方から沸き起こり、さらに世界恐慌の影響が加わってペルーは大きな危機を経験した。他方で今日のペルーは、「政党なき民主主義」といわれ、政党政治が崩壊するいっぽうで、アルベルト・フジモリ(Alberto Fujimori)政権以降は概ね自由で公正な選挙を通じて民主的に指導者が選出され、交替する状態が維持されてきた(Tanaka 2005)。しかし、後述するように、2016年以降のペルー政治は極めて不安定化しており、コロナ禍の社会経済への影響も加わって恒常的な危機状態にある(中沢2021)。不均衡な発展パターンが根本から変化していないならば、かかる構造に対する不満、反発の動きも1世紀前と似通ったものになるのではないか。

本稿は、以上の歴史的観点を導入して今回の総選挙を分析し、現代のペルーにおいて地方のダイナミズムが政治全体を動かす大きな要因になりつつあり、また2020年代以降の政治を特徴づける要素になっていく可能性を示すことを目的とする。まず、選挙前の状況を、社会経済的背景、コロナ禍の影響、そして2016年以降続く政治危機の観点から整理し、地方から新しいアクターが登場し変化の予兆が現れたことを指摘する。次に、2021年選挙について、第一回投票、決選投票、そして決選投票後選挙結果確定までに分け、カスティージョ勝利の過程を記述する。最後に、政権発足直後の情勢を踏まえて若干の考察を行う。

## 1 2021年ペルー総選挙の背景

### 1.1 資源ブームと格差、不平等

資源国ペルーでは、2020年のコロナ禍まで、ネオリベラリズムに基づく強い財政規律と安定した為替レート、そして一次産品輸出志向の経済運営によって持続的な成長が達成されてきた。特に21世紀初頭の約10年間は世界的な資源ブームに乗じて好景気を迎え、貧困率、失業率の改善に成功した。他方で、国内における不平等や格差問題はそのまま残り続けた。都市と農村の格差(磯田2021:32)は縮まらず、富はリマを中心とする太平洋岸地域の大都市に偏在している。

表1 地域別<sup>1)</sup>に見たペルーの人間開発指数<sup>2)</sup>

名称	地域区分	登録 有権者数	平均寿命 (歳)	中等教育 修了率 (18歳時点)	就学年数 (25歳以上)	平均家庭 月収 (単位:ソル)	人間 開発 指数
リマ市43区	リマ	7,558,581	80.37	75.86	10.71	1,492.97	0.7221
モケグア	コスタ南部	148,367	76.09	73.86	9.84	1,315.9	0.6589
アレキバ	コスタ南部	1,145,268	77.59	75.89	10.04	1,159.5	0.6425
カヤオ憲法特別市	リマ	824,496	78.09	73.14	9.96	1,162.5	0.6402
リマ地方部	リマ	764,063	75.70	70.04	9.33	1,181.53	0.6211
マドレ・デ・ディオス	セルバ	116,513	74.51	63.95	8.81	1,262.7	0.6136
イカ	コスタ南部	651,364	76.81	73.50	10.03	979.4	0.6000
タクナ	コスタ南部	282,974	74.86	72.77	9.73	990.8	0.5900
トゥンベス	コスタ北部	167,771	72.66	68.14	8.92	943.4	0.5552
ラ・リベルター	コスタ北部	1,429,469	76.89	60.84	8.32	923.8	0.5482
ランバイエケ	コスタ北部	977,656	77.58	69.25	8.50	785.6	0.5343
アンカシュ	コスタ北部	886,265	74.93	63.24	8.02	807.8	0.5159
ピウラ	コスタ北部	1,396,448	77.05	62.43	7.92	774.4	0.5130
クスコ	シエラ南部	1,025,280	72.41	71.77	8.32	764.6	0.5121
フニン	シエラ中部	982,556	72.94	67.30	8.63	757.3	0.5107
ウカヤリ	セルバ	389,889	70.64	49.51	8.38	799.8	0.4835
ロレト	セルバ	699,964	74.14	43.95	8.55	778.7	0.4834
サン・マルティン	セルバ	636,330	71.04	52.72	7.25	841.0	0.4832
パスコ	シエラ中部	200,682	73.13	67.81	8.29	639.5	0.4785
プーノ	シエラ南部	922,016	74.12	73.84	7.76	580.8	0.4656
ワスコ	シエラ中部	586,411	72.52	57.84	7.03	664.3	0.4537
アヤクチョ	シエラ南部	473,282	73.17	62.94	6.92	557.3	0.4327
カハマルカ	シエラ北部	1,103,247	73.32	51.20	6.27	620.5	0.4251
アマソナス	セルバ	306,186	68.95	45.48	6.47	669.5	0.4177
アブリマック	シエラ南部	316,000	69.78	65.47	6.71	516.8	0.4109
ワンカベリカ	シエラ南部	299,843	74.18	58.61	6.03	442.1	0.3838

出典：国連開発計画（PNUD, “El reto de la igualdad…”）をもとに筆者作成。登録有権者数は全国選挙過程事務所（ONPE）による。

表1は、2019年に国連開発計画が発表したペルーの人間開発指数（HDI）を地域ごとに示し、数値が高い順に並べたものである。数値が高いほど発展度合いが高いことを示す。首都が置かれるリマの市域が突出して高い値を示し、隣接するカヤオ、及び太平洋岸のコスタ各地がそれに続く。これに対し、山岳部のシエラ、そして東部セルバ地域が下位に位置していることが明瞭である<sup>3)</sup>。この間の経済成長はマクロ指標を押し上げたものの、必ずしも公正な再分配に結びつかず、国内の発展格差縮減に寄与しなかったのである。

輸出経済の恩恵にあずかれない人々を数多く抱えたまま、ペルーは2014年以降、資源ブーム終焉とともに景気後退の局面に入る。おりしもSNSや動画サイトが急速に普及しつつあり、首都リマ内部の格差もまたより鮮明に可視化され、多くの人々が共有するようになった。リマでは、経

済成長に伴い中間層と下層の上の人々が厚みを増してきたが、2018年から19年の間にこの傾向は止まり、かわりに下層の中及び下層の下の割合が増加した（表2）。

表2 ペルーの社会階層別世帯人口の割合（2019年）

	リマ	前回調査比	都市部	前回調査比	ペルー全体	前回調査比
上層（A層）	4.4	▽-0.7	2.1	▽-0.3	1.6	▽-0.2
中間層（B層）	22.0	▽-0.8	13.8	▲+0.2	10.8	▲+0.3
下層の上（C層）	42.8	▽-1.4	35.1	▲+1.0	27.7	▲+1.0
下層の中（D層）	24.8	▲+0.4	29.4	▽-1.7	24.8	▽-2.0
下層の下（E層）	6.0	▲+0.5	19.6	▲+1.4	35.1	▲+0.9

出典：ペルー市場調査企業協会（APEIM2020）。リマはリマ市43区及びカヤオ憲法特別市を含む。前回調査は2018年。

## 1.2 コロナ禍の社会経済への影響

ペルーでは2020年3月初頭に最初の感染者が出て以降、累積の新型コロナウイルス感染関連死者数が19万8,000人を超え（Our World in Data, “Peru: Coronavirus Pandemic Country Profile”）、100万人当たり死者数が5,000人と世界最悪の水準に達している。全国への感染拡大により、公的な保健衛生制度へのアクセスが困難な地方、特にセルバの先住民がより大きな影響を被った（中沢2021:234-237）。

経済面の影響も深刻である。経済活動の大半がインフォーマルセクターであり、不安定な就業が常態化しているペルーでは、全土ロックダウン、国内交通機関の完全停止等、初動段階で採られた厳しい移動制限を伴うコロナ対策は甚大な影響をもたらした。2020年のGDP成長率はマイナス10パーセント超を記録した（CEPAL2021:49）。また、リマを中心に2017年から増大傾向を示してきた貧困率はコロナ禍で一挙に10ポイント近く増加して全体の約3割を占めるに至り、10年前の水準に戻ってしまった（表3）。

表3 ペルーにおける地域別貧困率の推移（2009～2020年）

	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	前年比
全国	33.5	30.8	27.8	25.8	23.9	22.7	21.8	20.7	21.7	20.5	20.2	30.1	▲+ 9.9
リマ	16.1	15.8	15.6	14.5	12.8	11.8	11.0	11.0	13.3	13.1	14.2	27.5	▲+ 13.3
コスタ	20.7	19.8	17.8	16.5	15.7	14.3	13.8	12.8	14.4	13.5	13.8	25.9	▲+ 12.1
シエラ	48.9	45.2	41.5	38.5	34.7	33.8	32.5	31.7	31.6	30.4	29.3	37.4	▲+ 8.1
セルバ	47.1	39.8	35.2	32.5	31.2	30.4	28.9	27.4	28.6	26.5	25.8	31.0	▲+ 5.2

出典：国家統計院（INEI2021） リマはリマ市43区及びカヤオ憲法特別市を含む。

## 1.3 危機に陥る中央政治、地方から登場する新しいアクター

コロナ禍の以前から山積してきた問題に政治はうまく対処できなかった。2016年から2021年までの5年間、ペルー政界は諸勢力が対立を繰り返し、そのたびに国の機能がまひするという悪循環に陥ってきた<sup>4)</sup>。

2016年総選挙は、決選投票でペドロ・パブロ・クチンスキー（Pedro Pablo Kuczynski）がケイコ・フジモリを僅差で破って勝利したが、選挙の結果、国会では少数派の政府・与党と、国会で絶対過半数を握る野党人民勢力党（Fuerza Popular）という「ねじれ」が生じた。おりしもブラジル発の国際汚職捜査（「ラバ・ジャト」作戦）がペルーでも始まり、汚職疑惑が政敵を追い落とすためのカードとして使われるようになった。クチンスキーは汚職疑惑で野党から追及を受け、任期半ばで辞任した。

第一副大統領から昇格して政権を引き継いだビスカラ（Martín Vizcarra）は、やはり汚職追及を政治カードとして反撃に出、フジモリ派及びフジモリ派と同盟して政府に敵対してきたアブラ党（APRA）を追い詰めた。人民勢力党党首のケイコ・フジモリは過去の選挙キャンペーンにおける資金洗浄疑惑で逮捕・勾留され、またアブラ党のアラン・ガルシア（Alan García Pérez）は汚職疑惑で司法の追及を受け、警察に逮捕される前に拳銃自殺した。

2018年に行われた統一地方選<sup>5)</sup>では、対立を繰り返す既成政治勢力に対する懲罰的投票の傾向が見られた。特に汚職のイメージがついたフジモリ派とアブラ党は有権者から強いノーを突き付けられて大敗した。既成政治勢力が汚職疑惑で有権者に拒否されるなか、地方では中央政府と組織的繋がりが無い勢力が伸長した。かかる傾向は2002年の地方分権化以降顕著となり（Levitsky 2018:330）、政党を通じて地方を統制することを困難にしている。また、2018年の場合、中央政府に敵対的な候補が相次いで当選した。現与党の自由ペルー党（Perú Libre）を率いるフニン州のブラディミル・セロン（Vladimir Cerrón）をはじめ、プーノ、アレキパ、モケグア、タクナなどで当選した首長たちは、当選後、地元の鉱山開発と環境問題を巡る社会紛争や、地方に流入するベネズエラ避難民問題などに中央政府が有効に対処できていない点を突き、人々の不満と不信をあおりつつ中央政府への挑戦を繰り返してきた。

#### 1.4 恒常化する政治危機と変化の予兆

2019年9月、ビスカラは国会が度重ね政府の汚職対策を妨害し不信任の姿勢を示してきたことを理由に国会を解散した。国会解散に伴い、2020年1月に臨時の国会議員選挙が実施された。ここでも、前述の統一地方選と同様、人民勢力党とアブラ党の勢力後退が著しかった。かわりに地方を基盤とする宗教政党「ペルー農業人民戦線」（FREPP）や、民族主義を掲げ南部で武装叛乱を企図したアンタウロ・ウマラ（Antauro Humala）を支持する「ペルーのための団結」（UPP）が議席を獲得した（図2）。リマの中央政界とは無縁だった地方勢力が国会で一定の存在感を示すようになったのである。また、臨時国会議員選挙では、議席を獲得した政党が2016年時点から3つ増えて9政党となり、政治勢力が分裂し小党分立化していることが確かめられた。

国会解散の甲斐なく、新しい国会も政府との対立を選んだ。2020年11月、国会はコロナ対策と汚職疑惑で疲弊したビスカラを道徳的に不適格であるとして罷免、規定に則り国会議長を暫定大統領に据える。しかし、国民はこれを国会によるクーデターと受け止めて強い拒絶を示した。全国規模で抗議活動が発生し、デモを行っていた若者の中から死者が出るまでに至った。暫定大統領は僅か数日で辞任し、国会議員の中から代替りの人物が暫定大統領に選出されるまでの1週間、権力に大きな空白が生じた。

新たに暫定大統領に選出されたフランシスコ・サガステイ（Francisco Sagasti）は、喫緊の課題である国民への新型コロナウイルス向けワクチン接種計画に取り組みつつ、街頭での抗議活動

を担った若者たち（自ら「200周年世代」(generación bicentenario) と名乗る若い世代) を繰り返して称えるなどして和解を演出した。これら若者たちは、国会への抗議活動を行いつつ、現行の1993年憲法の破棄と新憲法制定を求めている(Áviles, *Washington Post*, 2020年11月17日)<sup>6)</sup>。また、サガスティ暫定政権下で、農業労働者による抗議活動を契機に農業振興法(ley de promoción agraria)が廃止され、労働条件の改善などを含んだ新たな関連法を制定することが決まった。同法は、アルベルト・フジモリ政権期に制定され、ネオリベラルな輸出振興策の根拠となってきた法律であった。選挙戦に入る直前に起きたこうした出来事は、何らかの「変化」が避けられないことを示す予兆だった。

## 2 第1回投票(4月11日)の過程

### 2.1 有力候補者不在の選挙戦

今回の総選挙には、選挙裁判所(JNE)に政党登録をしている24政党のうち、18政党が大統領候補を立てた。事前の投票意向調査では、棄権、白票、無効票、そして「分からない」の回答が多く、いずれの候補も20パーセント超の支持を得ることすらごく稀で、有力候補者不在の状況は最後まで変わらなかった。

極度に小党分立化した諸勢力がビリヤードの玉のようにぶつかり合い、各種世論調査における候補者の人気順位も目まぐるしく入れ替わるなか、決選投票に残る可能性がある候補が5、6名に絞られてきたのは4月初旬、投票日の10日ほど前になってからであった。まず、現行のネオリベラル体制からの「変化」を掲げる左派系の候補は人民行動党(AP)のジョニー・レスカノ(Yonhy Lescano)と「ペルーのために共に」党(JPP)のベロニカ・メンドーサ(Verónica Mendoza)であった。レスカノ(プーノ州出身)とメンドーサ(クスコ州出身)はともにシエラ南部に地盤があり、ライバル関係にある。2016年に次いで2度目の大統領選挙への挑戦となるメンドーサは、先行する穏健派のレスカノの地盤を揺さぶり、新憲法制定賛成、現状変革の立場へと一部の有権者を導いた。メンドーサは、数少ない女性候補であり、フランスで学位を取得したインテリ系のフェミニストとして人工中絶および同性婚の合法化を公約していた(磯田2021:36)ため、危機感を抱いた右派・保守派から執拗なネガティブキャンペーンを受け、前回立候補時を上回る支持を得られなかった。

右派は、レスカノやメンドーサをキューバ、ベネズエラシンパの共産主義者として攻撃しつつ、ネオリベラル体制の恩恵を強調して「現状維持」を訴えた。先行したのは人民刷新党(RP)のラファエル・ロペス・アリアガ(Rafael López Aliaga)であった。ロペス・アリアガは「ペルーのボルソナロ」を自称する企業家で(*RPP*, 2020年1月12日)、生殖医療や性教育等に対する姿勢の面で最保守に位置し、特にリマの富裕層やカトリック・福音派の保守層の間で人気を博した。しかし、本業のビジネスで汚職に関与した疑いが生じ(Ángel Páez, *La República*, 2021年3月29日)、人権軽視ともとれる様々な発言と相まって終盤失速した。入れ替わりに伸びてきたのが前進するペルー党(Avanza País)のエルナンド・デ・ソト(Hernando De Soto)である。『もう一つの道』(*El otro sendero*)の著者でフジモリ政権初期に政府に参加した経済学者として著名なデ・ソトは、ロペス・アリアガの票を奪いつつ、右派支持層だけでなく、穏健な中道層をも取り込んだ。他方で、デ・ソトは、かつてのスペイン人コンキスタドールのデ・ソトと同姓同名であることがその尊大



な態度と結び付けられ、リマの中上層、インテリ層以外には支持を広げられなかった。

## 2.2 第1回投票結果

ペドロ・カスティージョ1位、ケイコ・フジモリ2位。インターネット上に流出した非公開の模擬投票結果により、このような予想外の結果となる見通しが得られたのは投票日の前日のことであった。両者は投票日数日前になって伸びてきた候補であり、特にカスティージョへの支持増加が著しかった。

4月11日の投票結果はカスティージョが有効票の18.9パーセント得票で1位、フジモリが13.4パーセント得票で2位、いずれの候補も有効票の過半数を超えなかったことから、上位2名のカスティージョとフジモリの間で決選投票が行われることとなった。以下、得票率順にロベス・アリアガ11.8パーセント、デ・ソト11.6パーセント、レスカノ9.1パーセント、メンドーサ7.9パーセントと続く。同時に行われた国会議員選挙で議席を獲得したのは計10政党で、直近の2020年臨時国会議員選挙からの分極化傾向が続いた(図1,2,3)。全体として、候補者への支持が非常に低調であり、白票(8.7パーセント)、無効票(4.4パーセント)、そして棄権(30.0パーセント)の多さが目立った。コロナ禍のなかの選挙ということもあり、投票率は70.0パーセントと前回2016年時(81.8パーセント)から10ポイント超下がった。

1990年選挙で「ツナミ」と評されたアルベルト・フジモリの劇的な勝利になぞらえられるカスティージョの躍進はいかにして起きたのか。前述のとおり、左派系は最初レスカノが牽引し、メンドーサがより左の方へと有権者を導いたものの、メンドーサがネガティブキャンペーンの標的となったことで、左派票は行き場を失った。ここに、メンドーサを日和見と批判していた泡沫候補で、最左派に位置するカスティージョ(Hernández, Trome.pe, 2021年4月7日)が代替の選択肢として選挙戦最終盤になって浮上したと推測される。

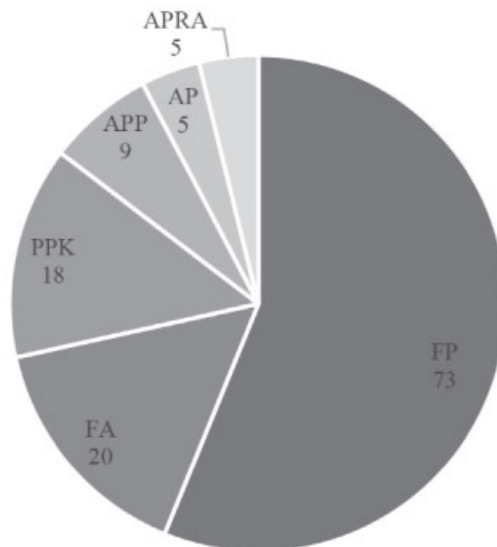


図1 2016年総選挙時の国会議席構成

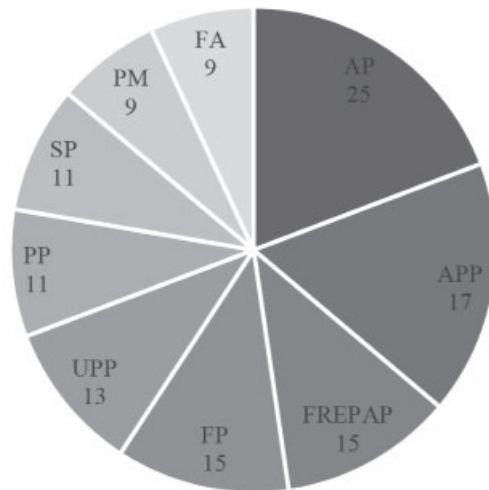


図2 2020年臨時国会議員選挙時の国会議席構成

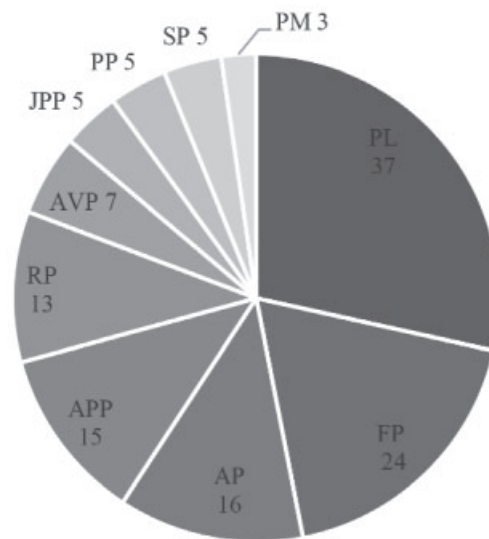


図3 2021年総選挙時の国会議席構成

図1,2,3 出典：ペルー全国選挙過程事務所（ONPE）のデータをもとに筆者作成。

凡例：AP（人民行動党）、APP（ペルーの進歩のための同盟）、APRA（アブラ党）、AVP（前進するペルー党）、FA（拡大戦線）、FP（人民勢力党）、FREPAP（ペルー農業人民戦線）、JPP（ペルーのために共に）、PL（自由ペルー党）、PM（紫の党）、PP（ポデモス・ペルー）、PPK（変革のためのペルー国民）、RP（人民刷新党）、SP（ソモス・ペルー）、UPP（ペルーのための団結）

フジモリは当初、ロペス・アリアガやデ・ソトラ居並ぶ右派系の候補の陰に隠れて目立たなかった。フジモリ派はこの5年間、政争に明け暮れ、党首であるケイコ・フジモリ本人の逮捕・勾留を経験して有権者からの支持を著しく落とした。2021年選挙におけるフジモリの戦術は、勢力を結集し、中道右派の既成政党として国会議席を維持することだった（村上 2021a:54）。フジモリは、

当初から大統領を目指す意図はなかったものの、ロペス・アリアガとデ・ソトの失速でやはり行き場を失った右派の支持を得、加えて旧来のフジモリ派支持者（後述）の後押しがあったことで僅かながらこれら2候補を上回り、2位に浮上することができたと推測される。

### 3 決選投票の構図：カスティジョ陣営

決選投票に進むまで、カスティジョは全くの泡沫候補と見なされており、報道からはほとんど無視されてきた。今や政治コミュニケーションに欠かせない存在となったソーシャルメディアにも当初カスティジョの姿は現れなかった。カスティジョが自身のツイッターアカウントを開設したのは2021年2月16日のことである。報道が全くのノーマークであったため、選挙キャンペーン中、どこで何をしていたのかも判然としない。

カスティジョとは誰か。第1回投票が終わったのち、国内外のさまざまなメディアがこぞってカスティジョに接触し、断片的ながらカスティジョの人となり进行を明らかにしてきた。これら報道<sup>7)</sup>を利用し、現在までに分かっている範囲でカスティジョの人物像と政治的背景、掲げる政策を描き出してみよう。

#### 3.1 カスティジョの人物像と政治的背景

ペドロ・カスティジョは1969年、北部カハマルカ州タカバンバ（Tacabamba）郡プニャ（Puña）の農村で三男として生まれた。両親はスペイン語の読み書きがほとんどできず、また1969年の農地改革までは土地なし農民で、地元のアシエンダで働いていた。両親は子の学費を工面できず、カスティジョは実家の畑仕事やセルバ地域のコーヒー農家への出稼ぎをしながら苦学して中等教育を修了した。さらに高等教育の学資を得るために首都のリマに出てきたカスティジョは、アイス売り、新聞販売、ホテルのトイレ掃除人などを転々とした。教員資格を得たカスティジョは1995年から地元プニャで小学校教師になり現在に至る。カスティジョは熱心な教員組合の活動家であり、また地元農民自警団（Rondas Campesinas / ロングス）<sup>8)</sup>のメンバー（rondero）としても活動した。

政治経験が全くないカスティジョ<sup>9)</sup>が全国的に知られるようになったのは、2017年の教員組合によるストライキ・抗議活動の時<sup>10)</sup>である。教員評価制度の廃止や給与の即時アップなどを要求してクスコ州で教員組合（SUTEP）の支部が始めたスト・抗議活動は全国に広がり、学校教育はまひした。これに対し政府は、クチンスキー大統領が大統領府で直接、組合と対話し、漸次の予定であった給与アップを前倒しで実施するなど大幅に譲歩したが、スト・抗議活動はその後も続いた。この時、SUTEPの分派を率いて最後までリマ市中心部で抗議活動を行ったのがカスティジョであった。SUTEPはペルー共産党「赤い祖国」派（Patria Roja）の影響が強く、カスティジョらの分派は組合内主流の「赤い祖国」派を日和見として激しく攻撃していたことから、背後に「赤い祖国」派と敵対する「恩赦と基本的権利のための運動」（MOVADef）の存在が取りざたされた。MOVADefはセンデロ・ルミノソの指導者アビマエル・グスマン（2021年9月11日獄中で死去）の恩赦を要求しているため、内務省によってセンデロの合法政治部門と見なされている。経歴上、カスティジョがセンデロと近い関係にあるとは考えづらい<sup>11)</sup>ものの、こうした背景から、現在に至るまで、カスティジョは常に敵対勢力から「テロリストシンバ」と名指され続けることになる。

### 3.2 カスティジョの政治信条と政策

カスティジョの政治的信条は単純である。若い頃からペルー各地を渡り歩き、ペルーの豊かな資源が国外に持ち出されるいっぽうで、路上には栄養状態が悪く健康を害した裸足の子どもが溢れている様子を見聞きしてきた。資源ブームでペルー経済が成長しているというニュースはよく耳にしたが、自身が教える生徒にはいっこうに何の恩恵もない。カスティジョは、目の前の不正への怒りから、国のあり方を根本から変えたいと望むようになった。2020年のコロナ禍で学校が閉鎖され、国からはオンライン授業に切り替えるよう指示されたものの、生徒に配られるはずだったタブレット型パソコンは結局届かなかった。この出来事が最後の一押しになり、大統領選挙に立候補することを決意したという。

カスティジョには自前の政党がない。カスティジョは自由ペルー党から大統領選挙に立候補したが、同党は前述したブラディミル・セロンが創設した政党で、カスティジョはいわば客員(invitado)の立場である。もともと自由ペルー党はセロンを大統領候補とする予定であった。しかしセロンはフニン州知事時代に汚職に関与した容疑で有罪判決を受けた(*El Comercio*, 2019年8月5日)ため、公職選挙に立候補できなくなった。そこで白羽の矢が立ったのがカスティジョだったのである。

カスティジョと自由ペルー党の掲げる政策はどのようなものか。自由ペルー党のマニフェスト(*Partido Político Perú Libre, "Plan de gobierno..."*)には、喫緊の課題である新型コロナウイルス禍対策とワクチン接種計画のほか、農業振興を目的とする第二の農地改革、現行の1993年憲法の破棄と制憲議会の招集による新憲法の制定、教育・保健衛生関連予算の大幅増、ガス・鉱山等天然資源開発に関わる外国企業との税・ロイヤルティ契約見直しなどの急進的な改革メニューが並ぶ。

### 3.3 カスティジョ陣営に対する支持・不支持の様相

カスティジョと自由ペルー党は、上記のように急進的な政策を掲げ、第1回投票において、人間開発指数の点で恵まれない地域で支持された。特に、鉱山が集中し、農村部に多くの貧困人口を有するシエラ南部からの期待は高く、ワンカベリカ、アプリマック、アヤクチョ、プーノでは50パーセント前後得票した。後述するフジモリの得票動向と著しい対照を成している。また、カスティジョの出身母体である教員組合と、教員組合内主流の「赤い祖国」派は、組織としてカスティジョを積極的に支持したわけではないものの、待遇改善への期待から、少なくとも数の教員がカスティジョを支持したと推測される。さらにカスティジョは、ペルーにおける左派政権成立に期待感を示す国内外の左派政治家からの支持を取り付けた<sup>12)</sup>。

他方で、カスティジョと自由ペルー党に対しては、「人権面で保守的、家父長的であり、またゼノフォビア(外国人憎悪)である」との批判が絶えない。マニフェストには、ジェンダー平等や人工妊娠中絶、同性婚等のテーマに言及がなく、カスティジョも公の場でこうしたテーマを扱わない。カスティジョが敬虔なカトリック、配偶者のリリア・パレデス(Lilia Paredes)が福音派で、ともに家族の価値を非常に重んじていることと関係していよう。また、党首セロンの地元であるフニン州都ワンカヨ(Huancayo)市では、自由ペルー党所属の市長が地方に流入するベネズエラ避難民の排除を公言して強い非難に晒されるという事件(中沢2020b:50)が発生している。

4月11日前に左派全般に対して行われていたネガティブキャンペーンは、決選投票の段になってカスティジョと自由ペルー党に的を絞る。前述した「カスティジョはテロリストシンバである」

という攻撃に加え、「カスティジョが大統領になるとペルーは共産主義の国になり、私有財産制が否定され産業国有化と外資排除が起きる」といったネガティブキャンペーンがマスメディア、SNSを問わず大々的に行われた。こうして、6月6日までの2か月近くのあいだ、カスティジョへの支持は50パーセントをやや上回る程度で止まり、そこから徐々に下落してフジモリとの差が縮まっていった。

#### 4 決選投票の構図：フジモリ陣営

ケイコ・フジモリが大統領選挙で決選投票に進むのは2011年、2016年に続いて今回が3度目である。フジモリの政治経歴はおよそ15年にわたり、父親のアルベルト・フジモリ時代を含めると、フジモリ派はおよそ30年にわたり政治勢力として存在し続けている。この間、フジモリ派の体質やペルー政治における立場は変化しており、今回の選挙戦ではフジモリ派の変質が鮮明となった。以下では、ケイコ・フジモリの政治経歴を振り返りつつ、2021年総選挙の構図の中にフジモリ派を位置づけたうえで、選挙戦の展開を記述する。

##### 4.1 アルベルトからケイコへ

元大統領アルベルト・フジモリの長女であるケイコは、父に代わってフジモリ派を引き継ぎ、2006年選挙で国会議員に当選したことを皮切りに政界に進出、2011年大統領選挙に「フェルサ2011」を率いて立候補し、オジャンタ・ウマラ（Ollanta Humala）との決選投票で敗北した。2011年当時ケイコ・フジモリを支持した人々は、社会階層面で下層の人々が多く、また地域別では首都リマよりも地方で多かった。こうした人々は、アルベルト・フジモリ政権時代の記憶に基づき、同政権の執政に対する感謝の念から従来フジモリ派を支持してきた人々である（Murakami y Barrenechea 2011:75）。

2011年選挙での敗北を転機として、ケイコは父アルベルトと距離を置き、フジモリ派につきまとう独裁、権威主義といった負のイメージの払しょくに努める。全国を遊説して人材をリクルートしつつ、リマ首都圏を中心とする都市部及び北部の経済的に豊かな層からも支持を獲得しようとした。2016年選挙では、旧来のフジモリ派支持層を超えて広範な支持を得、最多得票で決選投票に進むも、クチンスキーに逆転され僅差で敗北した。

2021年、フジモリ派の変質はより鮮明となる。第1回投票でフジモリは、リマ市ではデ・ソト、ロベス・アリアガに次いで3位に終わったものの、トゥンベス（37.0パーセント）、ピウラ（24.8パーセント）、ランバイエケ（21.4パーセント）、リマ地方部（20.7パーセント）など太平洋岸の地域で最多得票となった。いずれもアルベルト・フジモリ政権が始めた輸出志向の経済政策で恩恵を受け、相対的に人間開発指数で上位に位置する地域である。このように、20世紀末にアウトサイダー、反エスタブリッシュメントとして登場したフジモリ派は、二代目のケイコの時代になって既成政治勢力化の傾向を強め、現状維持を望む人々の利害を代表するようになったのである。

##### 4.2 エスタブリッシュメントからの支持と選挙戦術

アウトサイダーとして突如2021年選挙戦に登場したカスティジョは、1990年選挙当時のアルベルト・フジモリが体現していた反エスタブリッシュメントの立ち位置にあった。これに対しケ

イコ・フジモリは、90年選挙当時のバルガス＝ジョサと同じ立ち位置でカスティジョと大統領の座を争うことになった。カスティジョとの一騎打ちとなったフジモリをいち早く支持したのが他ならぬバルガス＝ジョサであったことは象徴的である。バルガス＝ジョサは、カスティジョが大統領になればペルーが共産化し、果てはクーデターを招来しかねないとしてペルーの有権者に対し、フジモリに投票するよう呼びかける論陣を張った（*El Comercio*, 2021年4月18日）。反フジモリ派言論人の中心的存在であったバルガス＝ジョサの転向は国際的にも注目された。バルガス＝ジョサに続き、右派・保守派を中心に既成勢力はこぞってフジモリ支持を打ち出し、また、大企業をスポンサーとするテレビ、新聞、ラジオがはっきりとフジモリに肩入れした。

追う立場のフジモリ側は、棄権や白票でなく、意図して自分に投票してくれるよう有権者を説得しなければならなかった。最初の決選投票候補者討論会をカスティジョの地元カハマルカで行うという相手方の提案を受け入れ、いわばアウェイの地へと乗り込んだ。また、コスタ南部の大票田であり、バルガス＝ジョサの地元でもあるアレキパで再度カスティジョとの討論会を行い、カスティジョから南部の票を奪い返そうと試みた。さらに、同地でベネズエラの野党指導者レオポルド・ロペス（Leopoldo López）らを招いた集会を開催し、自ら「共産主義の脅威からペルーの民主主義を守る」旗手であると内外にアピールした。

加えてフジモリ陣営は、第1回投票でカスティジョに入ったシエラ及び貧困層の票を獲得すべく、決選投票キャンペーンの段になって新たにさまざまな公約を打ち出した。すなわち、新型コロナウイルス禍で親族を失った家庭への1万ソーレス（約2300米ドル）の支給（*El Comercio*, 2021年5月4日）、65歳以上への年金の支給額倍増、カノン税<sup>13)</sup>40%の鉱業、ガス等の操業地域住民への直接還付などの政策などである（García Arrunátegui, *RPP*, 2021年5月17日）。特に最後のカノン税直接還付は、シエラ南部に集中する大規模鉱山やガス田が操業中の自治体住民に莫大な金額が渡ることになるため、カスティジョが圧倒的に優位なシエラ南部の選挙区でケイコが逆転する切り札として大きく宣伝された。

エスタブリッシュメントからの全面的な支持を得たフジモリはカスティジョを追い上げ、投票日1週間前には世論調査で僅かながら逆転の結果が出るようになる。

## 5 決選投票の結果とその後の動き

### 5.1 選挙結果概要

6月6日に行われた決選投票では、在外を含む全ての選挙区で投票率が上昇し、全体の投票率は74.6パーセントだった。第1回投票（70.0パーセント）よりも4.6ポイント上昇したものの、棄権が全体の4分の1と依然として高い割合を占めた。また、選挙区ごとの投票動向では、第1回投票と同様、カスティジョがシエラと南部を押さえ、フジモリがリマとその周辺部及びコスタ、そしてセルバで勝利する傾向が踏襲され、双方の得票率が逆転した州は存在しなかった（図4）。

北部では、太平洋岸のトゥンベス、ピウラ、ランバイエケ、ラ・リベルターでフジモリが勝利したのに対し、カハマルカと、隣接するアマソナスではカスティジョが勝利した。カハマルカはカスティジョの地元であり、カハマルカを発祥の地とするロンダスからの組織的支持があったと推測される。また両選挙区は人間開発指数の面で最も恵まれない、貧しい地域であることから、「変化」を訴えるカスティジョに支持が集まったと想定できる。

他方で、南部では、人間開発指数の面で上位に位置するアレキパ、モケグア、タクナでカスティジョが勝利した。アレキパとモケグアは、ティア・マリア（Tía María）、ケジャベコ（Quellaveco）等の鉱業開発で多額の資金が流入するいっぽうで、環境破壊を巡ってしばしば社会紛争が発生している。政府が資源開発事業により強く関与することを掲げるカスティジョに対し、紛争解決への期待が集まった結果であろう。そして、最南端のタクナでは、プーノ出身でアイマラ系の反体制知事ファン・トンコニ（Juan Tonconi Quispe）がカスティジョを支持し、地元の票を固めたこ

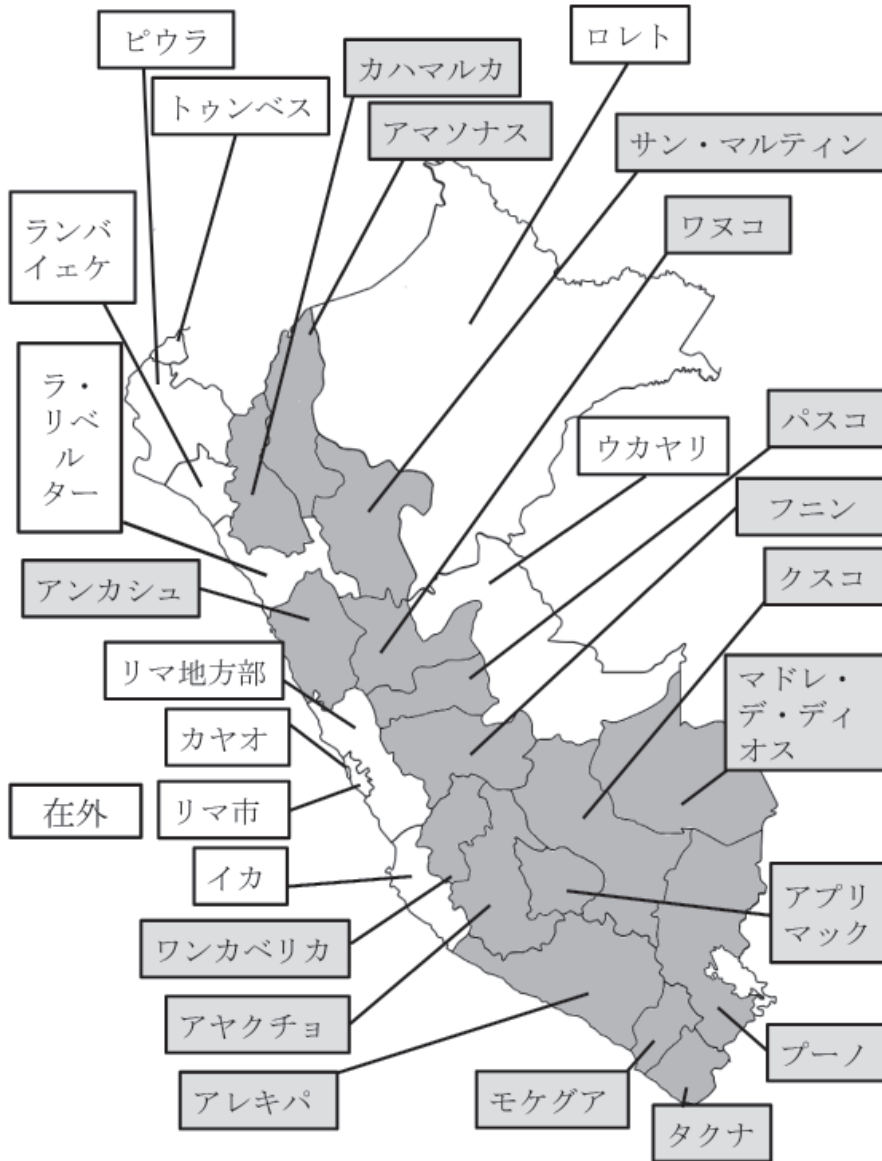


図4 決選投票における地域別の勝敗地図

塗りつぶしがカスティジョが勝利した州、無地がフジモリが勝利した州を示す。  
出典：ONPE の集計結果から筆者作成。

と（Grompone y Peña Jimenez 2021:135-136）が勝因として挙げられる。

投票終了直後の出口調査（boca de urna）ではフジモリが僅かに優勢であったが、当日深夜の開票速報（conteo rápido）ではカスティジョが逆転した。両者の差は1パーセント未満であったことから、勝敗の宣言は行わず、全国選挙過程事務所（ONPE）による公式の集計結果を待つことになった。集計結果は、ONPEの本部があるリマに近い投票所のものが先に発表され、交通不便な地方ほど発表は遅くなる。時間が経つにつれ、シエラを中心に地方票を押さえるカスティジョの優位が確実にになっていった。

各地の投票所から送付された開票・集計結果証書（acta・以下「証書」）をONPEが整理し、インターネット上での公表を終えたのは投票日から9日後の6月15日、全国選挙裁判所（JNE）が最終選挙結果を発表したのは7月19日のことであった。登録有権者数2528万7954人、有効票1762万8497票、うちカスティジョの得票は883万6380票で有効票の50.126パーセント獲得、フジモリの得票は879万2117票で49.874パーセント、僅か4万4263票差でカスティジョが勝利した。

## 5.2 「不正選挙」の訴えとフジモリの敗因

カスティジョ勝利が正式に決定するまで40日超を要したのは、主としてフジモリ陣営から、選挙で組織的に「不正」（fraude）が行われたとの訴えがJNEに対して起こされたためである。

フジモリ陣営は、シエラ地域、特にアイマラ系住民が多いプーノ州で不自然に票が偏っているとして（カスティジョが89.256パーセント、フジモリが10.744パーセントの得票）、投票所で投票立会人（personero）によって集計結果が操作されたと主張し、「不正」が行われた投票所の証書を無効とするよう、JNEに対し訴えを起こした（*Gestión*, 2021年6月9日）。JNEはかかる訴えを退け、組織的な「不正」があったとは認められなかった<sup>14</sup>。しかしフジモリは最終選挙結果が発表されても「不正」説にこだわり、公的にカスティジョを大統領であると認めたのは就任式後のことであった（*Correo*, 2021年8月23日）。プーノに隣接するアレキパで人目を引く集会を行い、またカノン税の一部を地域住民に直接還付する計画を発表するなどしてシエラの票を獲得しようとしたが、逆に強く拒絶される結果に終わったことへの反省の言は聞かれなかった。

また右派・保守派は、地方の先住民系有権者による「不正」説を利用し選挙結果を否認する言説を流布し続けた。これに対し、票を操作したと名指しで攻撃されたプーノほか地方の有権者から、自分たちの票を無きものにしようとする露骨な差別であるとして強い怒りの声が上がった（*La República*, 2021年6月9日）。ペルーでは独立以降、1980年に至るまで非識字者（先住民が多い農村の人々とほぼ同義）の選挙権が認められなかった歴史的経緯がある。有権者の怒りは、識字要件撤廃後の現在においても人種主義、植民地性に基づく政治参加からの排除が行われていることに向けられたのである。

フジモリ陣営及び右派・保守派は、地方で「不正」が行われたために勝利が奪われたとの立場を一貫してとった。他方で、首都圏におけるフジモリとカスティジョの得票分布はどのようなものだったか。

フジモリは、最大の都市部であるリマ市43区及びカヤオ7区で構成される首都圏の全てでカスティジョに勝利している。フジモリの首都圏における平均得票率は68.758パーセントで、最富裕層が集中する区では9割近く得票している。ただし、前述したとおりリマ首都圏は内部格差が大きく、かかる格差が両候補の得票動向に反映している。すなわち50区それぞれの両候補の得票率



と人間開発指数の関係を見ると、居住区の人間開発指数が高い数値になればなるほどフジモリが選好され、逆に人間開発指数が低くなるとカスティジョを選好する割合が多くなる傾向が見られた（図5及び図6）。全体として、首都圏でカスティジョと自由ペルー党が歓迎されていない傾向は変わらないものの、フジモリへの支持が中上層に偏りがちであることが分かる。リマの有権者のおよそ3割はフジモリに投票しなかったのである。

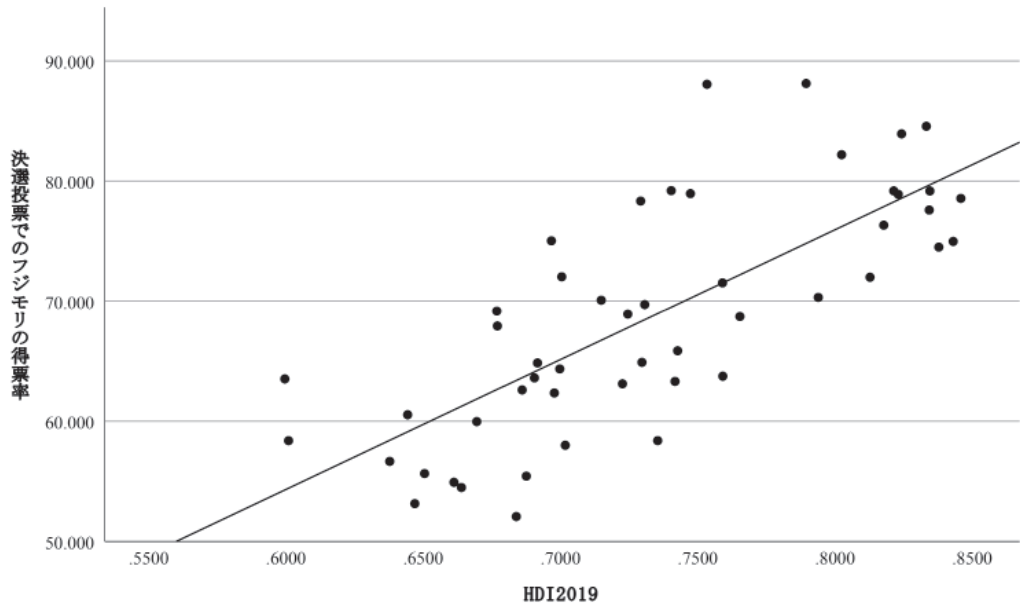


図5 リマ首都圏各区におけるフジモリの得票率（パーセント）と人間開発指数（HDI）の関係  
 出典 ONPE の集計結果及び国連開発計画（PNUD, “El reto de la igualdad…”）をもとに筆者作成。

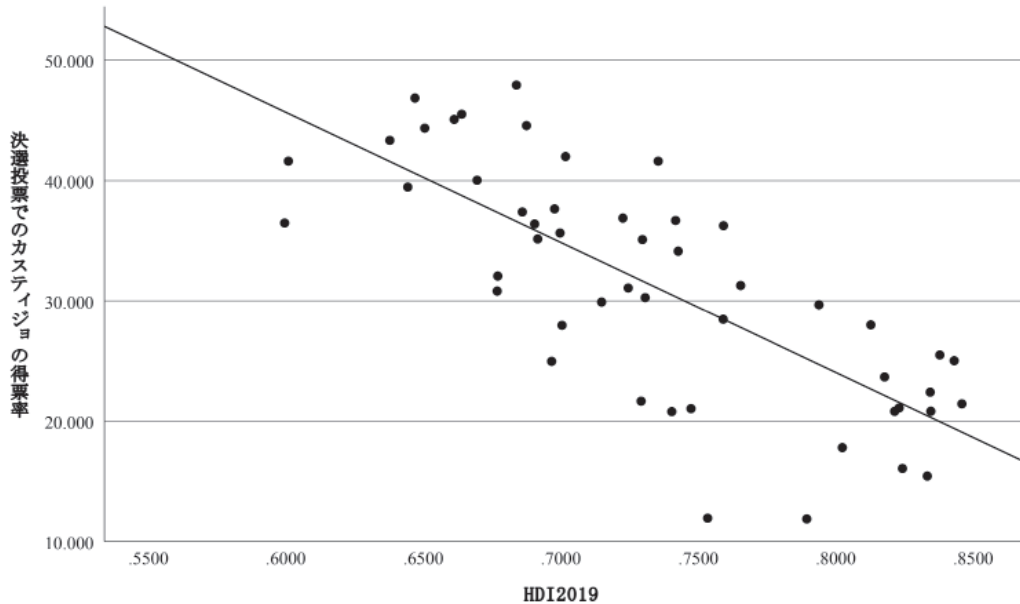


図6 リマ首都圏各区におけるカスティジョの得票率（パーセント）と人間開発指数（HDI）の関係

出典 ONPEの集計結果及び国連開発計画（PNUD, “El reto de la igualdad…”）をもとに筆者作成。

## おわりに

本稿では、「地方の叛乱」という視点から、カスティジョ急進左派政権成立の背景を明らかにしてきた。すなわちカスティジョ政権とは、選出過程にさまざまな偶然的要素を含みつつ、20世紀以降の不均衡な発展パターンを構造的要因として、コロナ禍で表面化し深刻化した貧困や格差、中央政府における恒常的な政治対立、人種主義や植民地性といった複合的な要素がもたらした危機に対する反発の結果であった。危機は大きな変革の契機でもあるとするならば、ペルーは目下変化の途上にあると推測される。

これまで述べてきたように、2021年ペルー総選挙の過程は、数多くの波乱を含み、その余波はカスティジョ就任からおよそ1か月半が経過した本稿執筆時点（2021年9月中旬）でも続いている。大胆な変革を掲げて大統領に就任し、数多くの地方出身者を閣僚など重要ポストに登用したカスティジョは、野党勢力、大手メディア、財界など、リマを中心とするエスタブリッシュメントから早くも強い反発を受けている。新政権発足の祝賀ムードはほとんどなく、いわゆる「ハネムーン期間」もカスティジョにはない。

国のあり方を変えたいと望んで大統領になったカスティジョは、5年の任期のうちいかなる「変化」をペルーにもたらすのか。実現すれば最も重要な改革となる新憲法制定はまだアイデアの域を出ていない。大きな改革の実行には国会の支持が必要だが、与党である自由ペルー党は国会で計130議席中の37議席を占めるに過ぎない。野党勢力の中には、隙あらばカスティジョを弾劾し罷免しようと目論む強硬派も存在する。さらに、カスティジョには教員層とロンダス以外に組

織的基盤がない。決選投票で過半数得票したとはいえ、第1回投票時の2割弱という得票率が国民からの支持の実態なのである。「地方の叛乱」はカスティジョを大統領に押し上げたが、実際はさまざまな利害関係を有する雑多なアクターの集合体であり、こうしたアクターたちが政権を支持し続ける保証はない。「変化」が利益をもたらすと大多数の国民を説得しなければならないのは言うまでもない。

前世紀、レギアの政府がクーデターで倒れ、アヤ・デ・ラ・トーレやマリアテギが寡頭支配打倒の狼煙を上げ、武装叛乱や暗殺が横行するなど騒然とした政情のなか、1931年の男子普通選挙へ向けた選挙制度改革に携わったバサドレは、反中央集権主義、反リマ中心主義の運動は、経済社会問題の解決と社会正義を伴わなければ無利益であると断じた (Basadre 1987:217-220)。21世紀に「地方の叛乱」を担って政権に就いたカスティジョ新政権には、コロナ禍のなかでまさに経済社会問題の解決(経済回復と貧困・失業対策)と社会正義(格差と不平等、人種主義や植民地性による差別の是正)を同時に達成することが求められる。独立300年に向かって歩み始めたペルーの課題は重い。

(2021年9月15日脱稿)

謝辞: 本稿執筆にあたり、村上勇介(京都大学)、カルロス・メレンデス(Carlos Meléndez/チリ・ディエゴ・ポルタレス大学)から資料提供など協力を得た。また、2名の匿名査読者から重要な示唆を賜った。記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 首都であるリマ(リマ市43区及び隣接するカヤオ憲法特別市)、太平洋岸のコスタ(北部、中部、南部に分割)、山岳地帯のシエラ(北部、中部、南部に分割)、そして熱帯雨林が広がる東部セルバの4区分。
- 2) 人間開発指数(Human Development Index)は、国の発展度合いを測る指標として用いられ、保健衛生、教育程度及び所得の3側面から測定される。
- 3) 例外はマドレ・デ・ディオス州であるが、同州では平均家庭月収が高い値を示すのに対し、平均寿命及び教育程度の値が低い。これは、同地域において大々的に行われている違法な森林伐採、金採掘及び麻薬取引による資金が流通していることと関連があると推定される。
- 4) 以下、本項及び次項の記述にあたっては、中沢(2020a, 2020b, 2021)及び村上(2018)を参照。
- 5) ペルーでは、5年に一度の大統領・国会議員選挙とは別途、4年に一度の統一地方選によって州知事以下地方自治体の長が選出される。
- 6) 「200周年世代」の活動はSNSを通じて広く知られ、特に有権者の3割近くを占める30歳未満の世代(JNE 2021:12)に対し、新憲法賛成への世論を喚起したであろうことは容易に推定できる。ただし、2021年の選挙キャンペーン中、これら若者が大規模なデモを組織し活動したわけではなく、若年者が層として新憲法制定を目指すカスティジョを支持したかは定かではない。
- 7) 以下、カスティジョのプロフィールについては、Briceño, Associated Press, 2021年4月19日; EFE, 2021年6月5日; El Búho.pe, 2020年10月29日; Jacobinmag.com, 2021年6月24日を参照。
- 8) 農民自警団(Rondas Campesinas / ロンダス)は1970年代の半ばにカハマルカ州の農民が結成

した組織である。当時カハマルカでは、警察、司法が機能せず、家畜泥棒など窃盗が深刻な問題になっていたため、農民たちが自発的に夜警を組織したこと（Starn 1999:55-56）が始まりである。ロンダスは特に国家の支援が行き届かない遠隔地の治安維持に有効であったことから、ペルー各地に広がった。

- 9) 公職に立候補したのは2002年の統一地方選挙のみで、この時には地元カハマルカのアンギア（Anguía）町長選挙に立候補して落選している。
- 10) この段の記述は、筆者が2017年7月13日から9月16日にかけて、当時教育省で大臣顧問を務めていた人物に対しリマ市内で断続的に行ったインタビュー、及びカハマルカ市内で2018年12月6日にSUTEP幹部に対して行ったインタビューデータに基づく。
- 11) 前掲注8で言及したロンダスは、1980年代に全国のシエラ地域で武装闘争を開始したセンデロと対峙し、コミュニティ自衛に役割を果たしたことで知られる。カハマルカにセンデロの影響が及ばなかったのはロンダスの自衛活動に依るところが大きい（前掲注10のSUTEP幹部）。
- 12) 国内では「ペルーのために共に」のベロニカ・メンドーサ、国外ではボリビアの元大統領エボ・モラレスやウルグアイの元大統領ホセ・ムヒカがカスティジョを支持した。
- 13) 鉱業、ガスなど、採掘業に関わる企業が、操業する地域の自治体に対し、学校、道路建設などのインフラ整備向けに支払う税金。
- 14) ペルーに選挙監視団を派遣した米州機構（OEA）は、今回の選挙過程全体を肯定的に評価し、深刻な問題は見当たらなかったと結論づけている（OEA, 2021年6月11日）。ペルーの選挙制度における投票立会人制度とその歴史的意義については、村上（2021b）及び八木（2015）を参照。

## 参考文献\*

磯田沙織

- 2021 「分断を深めるペルー—国内における対立が可視化された2021年総選挙」『ラテンアメリカ・レポート』、38巻、1号、28-43頁。

清水達也

- 2017 「右派への支持が集中した2016年ペルー大統領選挙」『ラテンアメリカ・レポート』、33巻、2号、17-32頁。

中沢知史

- 2020a 「時事解説 ペルー・ビスカラ政権における政治対立—政争の果てに行き着いた国会解散と臨時国会議員選挙」『ラテンアメリカ時報』、63巻、1号、37-40頁。
- 2020b 「2020年ペルー臨時国会議員選挙—ビスカラ政権における政治勢力の断片化と混迷の深化—」『ラテンアメリカ・レポート』、37巻、1号、44-51頁。
- 2021 「ペルー・ビスカラ政権の崩壊—コロナ禍のなかで恒常化する政治危機—」『アカデミア 社会科学編』、21号、231-249頁。

村上勇介

- 2018 「ペルーの最近の政治動向—フジモリ元大統領の恩赦、クチンスキー大統領の辞任、ビスカ

---

\* 以下全てのインターネット資料最終閲覧日：2021年9月15日

- ラ新政権の今後」『ラテンアメリカ時報』、61 巻、2 号、36-39 頁。
- 2021a 「2021 年ペルー選挙—ボリバルの呪縛?—」『ラテンアメリカ時報』、64 巻、3 号、52-55 頁。
- 2021b 「カスティジョ政権の成立とペルーの今後—『大統領選結果公表』以降の動静—」『ラテンアメリカ・カリブ研究レポート』、1-4 頁、  
[https://latin-america.jp/latin\\_data/download-info/49555/](https://latin-america.jp/latin_data/download-info/49555/)

八木百合子

- 2015 「ペルーの選挙制度について」『選挙時報』、64 巻、10 号、1-22 頁。

Asociación Peruana de Empresas de Inteligencia de Mercados (APEIM ペルー市場調査企業協会)

- 2020 *Niveles socioeconómicos 2020*, Lima.  
<http://apeim.com.pe/wp-content/uploads/2020/10/APEIM-NSE-2020.pdf>

Basadre, Jorge

- 1987 *Perú: problema y posibilidad, quinta edición, reproducción facsimilar de la primera edición de 1931*, Librería Studium. Lima.

Comisión Económica para América Latina y el Caribe (CEPAL 国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会)

- 2021 *Panorama social de América Latina 2020* (LC/PUB.2021/2-P/Rev.1), Santiago.  
<https://www.cepal.org/es/publicaciones/46687-panorama-social-america-latina-2020>

Instituto Nacional de Estadística e Informática (INEI 国家統計院)

- 2021 *Evolución de la pobreza monetaria 2009-2020. Informe técnico*, Lima.  
[https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones\\_digitaless/Est/pobreza2020/Pobreza2020.pdf](https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones_digitaless/Est/pobreza2020/Pobreza2020.pdf)

Jurado Nacional Electoral (JNE 全国選挙裁判所)

- 2021 *Elecciones generales 2021. Estadísticas del Padrón Electoral*, Lima.  
[https://portal.jne.gob.pe/portal\\_documentos/files/ef964676-565d-4a52-a1a6-bd0db43b816e.pdf](https://portal.jne.gob.pe/portal_documentos/files/ef964676-565d-4a52-a1a6-bd0db43b816e.pdf)

Grompone, Romeo y Omayra Peña Jimenez

- 2021 “Pedro Castillo, una identidad reconocida en múltiples trayectorias”, Raúl Asencio (ed.), *El profe. Cómo Pedro Castillo se convirtió en presidente del Perú y qué pasará a continuación*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima, pp.103-140.

Levitsky, Steven

- 2018 “Peru: The Institutionalization of Politics without Parties”, Scott Mainwaring (ed.), *Party Systems in Latin America*, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 326-355.

Murakami, Yusuke y Rodrigo Barrenechea

- 2011 “Fuerzas y límites del ‘Fujimorismo sin (Alberto) Fujimori’”, Carlos Meléndez (comp.), *Anti-candidatos. Guía analítica para unas elecciones sin partidos*, Aerolíneas Editoriales, Lima, pp.71-84.

Starn, Orin

1999 *Nightwatch: The Politics of Protest in the Andes*, Duke University Press, Durham and London.

Tanaka, Martin

2005 *Democracia sin partidos. Perú 2000-2005: los problemas de representación y las propuestas de reforma política*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

### 新聞・雑誌記事（紙版及びオンライン版）

Ángel Páez, Doris Aguirre

2021 “Exgobernador vinculado con Odebrecht amplió concesión de hotel a López Aliaga”, *La República*, 29 de marzo.

<https://larepublica.pe/elecciones/2021/03/29/cusquenos-reclaman-a-empresa-de-rafael-lopez-aliaga-que-devuelva-hotel-pltc/>

Áviles, Marco

2020 “La flamante generación que rescató la democracia peruana desde las calles”, *Washington Post*, November 11.

<https://www.washingtonpost.com/es/post-opinion/2020/11/17/peru-protetas-merino-renuncio-jovenes-generacion-bicentenario/>

Correo (<https://diariocorreo.pe/>)

2021 “Keiko Fujimori reconoce a Pedro Castillo como presidente y afirma estar dispuesta a reunirse con él”, 23 de agosto.

El Búho (<https://elbuhu.pe/>)

2020 “Elecciones 2021: Perú Libre lanza como precandidato presidencial a Pedro Castillo”, 29 de octubre.

El Comercio (<https://elcomercio.pe/>)

2019 “Junín: Vladimir Cerrón fue condenado a cuatro años de prisión”, 5 de agosto.

2021 “Vargas Llosa: ‘Los peruanos deben votar por Keiko Fujimori, pues representa el mal menor’”, 18 de abril.

“Keiko Fujimori sobre el ‘Bono Oxígeno’: ‘Pensamos entregar S/10 mil a todas las familias que han perdido familiares por COVID-19’”, 4 de mayo.

Gestión (<https://gestion.pe/>)

2021 “Keiko Fujimori: Fuerza Popular presentó recursos de nulidad para 802 actas”, 9 de junio.

La República (<https://larepublica.pe/>)

2021 “Miembros de mesa de Puno denunciarán a Keiko Fujimori si no se rectifica”, 9 de junio.

RPP (<https://rpp.pe/>)

2020 “Rafael López Aliaga anuncia su candidatura a la Presidencia por Solidaridad Nacional”. 12 de enero.

## インターネット資料

Briceño, Franklin

2021 “Misericordia rural impulsa candidatura de maestro en Perú”, Associated Press, 19 de abril.  
<https://apnews.com/article/noticias-b70cb0774bba0a410f2649ba955fdb5a>

EFE

2021 “Las humildes raíces del campesino que aspira a la presidencia del Perú”, 5 de junio.  
<https://www.efe.com/efe/america/politica/las-humildes-raices-del-campesino-que-aspira-a-la-presidencia-peru/20000035-4554697>

Fundación Internacional para la Libertad

2021 “XIV Foro Atlántico ‘Iberoamérica: democracia y libertad en tiempos recios’”, 9 de julio.  
<https://www.youtube.com/watch?v=M3hLg2PBqEk>

García Arrunátegui, Alejandra

2021 “Elecciones 2021: las propuestas de Pedro Castillo y Keiko Fujimori que no están en sus planes de gobierno”, RPP, 17 de mayo.  
[https://rpp.pe/politica/elecciones/elecciones-2021-las-propuestas-de-pedro-castillo-y-keiko-fujimori-que-no-estan-en-sus-planes-de-gobierno-el-poder-en-tus-manos-noticia-1336790?fbclid=IwAR37k58yui6i\\_LyPzrAUxQfgItb-bR91rWt3-9Zhp8em1Uwslpc5OS\\_qhmM](https://rpp.pe/politica/elecciones/elecciones-2021-las-propuestas-de-pedro-castillo-y-keiko-fujimori-que-no-estan-en-sus-planes-de-gobierno-el-poder-en-tus-manos-noticia-1336790?fbclid=IwAR37k58yui6i_LyPzrAUxQfgItb-bR91rWt3-9Zhp8em1Uwslpc5OS_qhmM)

Hernández, Jimmy

2021 “Pedro Castillo: ‘Verónica Mendoza es una oportunista y farsante’”, Trome.pe, 7 de abril.  
<https://trome.pe/actualidad/pedro-castillo-veronika-mendoza-es-oportunista-farsante-noticia/>

Jacobinmag.com

2021 “Peru’s Socialist President-Elect, Pedro Castillo, in His Own Words”, June 24.  
<https://jacobinmag.com/2021/06/peru-pedro-castillo-human-rights-constitution-state-corruption>

Oficina Nacional de Procesos Electorales (ONPE 全国選挙過程事務所)

<https://www.onpe.gob.pe/>

Organización de Estados Americanos (OEA 米州機構)

2021 “Misión de observación electoral de la OEA en Perú presenta informe preliminar”, comunicado de prensa C-065/21, 11 de junio.  
[https://www.oas.org/es/centro\\_noticias/comunicado\\_prensa.asp?sCodigo=C-065/21](https://www.oas.org/es/centro_noticias/comunicado_prensa.asp?sCodigo=C-065/21)

Our World in Data

2021 “Peru: Coronavirus Pandemic Country Profile”, September 15.  
<https://ourworldindata.org/coronavirus/country/peru>

Partido Político Perú Libre

s/f “Plan de gobierno. Perú al bicentenario sin corrupción”  
<http://perulibre.pe/plan-bicentenario.pdf>

Presidencia de la República del Perú

2021 “Discurso de Asunción del Presidente de la República, José Pedro Castillo Terrones, 28 de Julio de 2021”, 28 de julio.  
[https://cdn.www.gob.pe/uploads/document/file/2049663/Mensaje\\_a\\_la\\_nacion\\_presidente\\_Pedro\\_Castillo.pdf.pdf](https://cdn.www.gob.pe/uploads/document/file/2049663/Mensaje_a_la_nacion_presidente_Pedro_Castillo.pdf.pdf)

Programa de las Naciones Unidas para el Desarrollo (PNUD 国連開発計画)

2019 “El reto de la igualdad: una lectura a las dinámicas territoriales en el Perú”, 27 de noviembre.  
<https://www.pe.undp.org/content/peru/es/home/library/poverty/el-reto-de-la-igualdad.html>





# BOLETÍN del

**Instituto de Estudios Latinoamericanos  
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto**

**Instituto de Estudos Latino-Americanos  
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto**

## 2021

### < ARTÍCULOS >

¿La erupción catastrófica del Volcán Ilopango en El Salvador Centroamérica habría forzado a los habitantes de Chalchuapa a abandonar el centro ceremonial Tazumal?, ¿Cuál es el fechamiento absoluto de la erupción volcánica?  
..... Shione SHIBATA 1

Elecciones Generales de Perú de 2021:  
el proceso del surgimiento de la izquierda radical y el futuro de la “subversión  
de provincias”  
..... Tomofumi NAKAZAWA 39

Reflexiones en torno a la significación de frases de “gusto” en maya yucateco  
actual: una perspectiva lingüística y antropológica  
..... Elí CASANOVA MORALES/Yuko OKURA 63

### < ESTUDIOS PRELIMINARES >

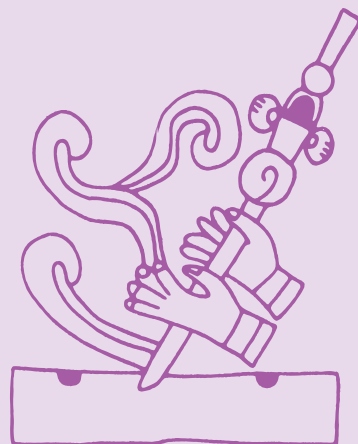
Esbozo de los estudios latinoamericanos en el Japón de la preguerra  
— Los logros de Ryoji Noda, Kotaro Tanaka, Yoshitaro Amano y otros autores —  
..... Toyoharu TSUJI 89

### < INFORME DE INVESTIGACIÓN >

The Use of Both Archaeological Data and Historical Documents  
in Studies of the 16th-18th Century Maya: Importance and Issues  
..... Yuko SHIRATORI 105

### < RESEÑA DE LIBROS >

*Historia latinoamericana en la política internacional:  
a través de la perspectiva de realismo basada en la experiencia real* por  
Toshio Watanabe  
..... Takashi USHIJIMA 117



Vol.  
**21**